
アクイエム戦記

シーザー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アクイエム戦記

【Nコード】

N9010D

【作者名】

シーザー

【あらすじ】

疲弊した帝国、腐りきった軍幹部、そして畏にかかった英雄、腐敗しきった帝国を「解放」するため、彼らは無謀な戦いを始める

始動

その世界には名前が無い

忘れ去られたのか、それとも元々無いのか・・・

その世界では3つの超列強国と5つの列強国が争っている

世界最大にして最強の超列強国、ヴァン帝国

ヴァン帝国と双璧をなす超列強国、レクイル皇国

強力な騎士団を中核とした軍を持つ超列強国、ベガル王国

今はこの三国を記述しておけばいいだろう

新暦194年、ヴァン帝国とレクイル皇国は10年に及ぶ大戦争を終結させた

残ったのは傷付いた兵士たちと、疲弊した国家だけであった

そしてこの物語は戦争終結から4年後になる新暦198年から始まる・・・

始動

（後書き）

ぐだぐだな物語となりますが御付き合いお願いします

更新は不定期ですのでまったりとお待ち下さい

第一部：一 失脚

新暦1988年6月3日

「父さん、調子の方は大丈夫ですか？」

まず一言で言うなら彼は美しい

顔立ちは美しく整い、整えられた銀髪と合わさったその姿は女にも見えなくも無い

しかし、その体は鍛えぬかれ、細身ながら締まっているのが良く分かる

そんな彼の目の前に、彼と雰囲気がよく似た男が座っている

「ああ、任務に支障は無いさ、それに私が出ることはさすがに無いだろう」

顔は若干違うがそれでもよく似ていて、体格は全く同じと言っていい

「そうですか、あまり無理をしないでくださいね。そろそろ歳も来ているのですから」

彼の言葉を聞いた男は苦笑いでこう答える

「まだまだ現役さ」

そう言うと男は立ち上がり、外へ向かう

「じゃあ行ってくる」

男は扉を開けるが何かを思いついたようにふり返る

「そうだ、お前にこれを渡しておく」

男は腰に差していた一本の剣を彼に差し出す

「これは・・・」

「我が家に代々伝わる剣だ、お前に渡しておく」

「どうしたんですか突然？」

彼は困惑した表情で男を見つめた

「さあな、なんとなくこれをお前に渡しておきたかった。それだけだ」

男は優しくほほ笑む

「レイル、お前は良く育ってくれたな、親として誇りに思うぞ」

そう言うのと、そのまま扉の向こうに行ってしまった

数日後、レイルの下に1人の男が馬をおもいつきりとはしてやってきた

「レイル様！！へっ、陛下が暗殺されました！！」

「なっ、詳しく教えてくれ」

それはありえない事だった

「そっそれが、帝国の重鎮を招いた晩餐会の時に、突然明かりが消え、ついたときには陛下の胸に深々と剣が刺さっていたのです」

それを聞いてさらにレイルは驚いた

その晩餐会の警備を担当したのはほんの数日前にわかれた父親その人だからだ

自分の父親の力量は一番良く知っている、大陸随一の名将と呼ばれたその人が警備などで不手際をおこすわけがない

「父上はどうした？」

男はうつむいた

「シド大元帥閣下は、・・・暗殺の主犯として捕まりました」

「・・・嘘だろ、嘘と言ってくれ！！」

ありえない、あの温厚な父親が暗殺などするはずが無い

レイルは心を乱した

「レイル様、シド様は私にこう言いました」

一呼吸空けて言った

「私は暗殺などしていない、お前ならわかってくれるだろう。おそらく、真犯人は私が失脚して一番得をする者、ガウス元帥だと私は思う。すでに何人かの信頼できる部下に探らせている。その者たちがきつと真犯人を見つけてくれるだろう。だが・・・」

ここで男の言葉が止まった

「どうした？続けてくれ」

「はっ、・・・だが、そのころには私の命は無いだろう。裁判は迅速に行われる。私は死罪だ。後の事はオルフェンに任せてあるから、一族全員死罪と言うことはさすがにガウスでも出来ないだろう。今でも私を慕う者は多い。レイル、後はお前の手腕にかかっている。味方は大事にしろ、敵は食え、いいな」

「・・・すぐにレイル様を捕まえるために兵が来ます」

レイルは目を閉じた

おそらく父親は数日後には死ぬだろう

ガウス元帥は繊細な男だ、きっとすべての手筈を整えて行ったことだろう、ならば・・・

「ガウス元帥の事だ、逃げる事は出来ないだろう。少し頼みがある、いいか？」

「はっ」

「ルトガー上級大將に、任せた、と伝えてくれ」

男は少々困惑した表情をしたがすぐに馬を走らせた

数時間後、帝国兵200人が邸を取り囲んだ

レイルは1人邸を出て、降った

第一部：二 裁判

レイルが捕らわれてから3日後、大戦の英雄シドは天へ召された
英雄の最後に民は頬を湿らせた

その死に際は英雄の名にふさわしく、威風堂々とした物だった

「そうか、父さんは逝ったか」

「申し訳ございません、私の力では止める事は出来ませんでした」
暗い牢獄の中でレイルはその男とあっていた

「オルフェンのせいではないよ、父さんは覚悟を決めていた」

帝国の若き将軍、オルフェン中将の目には大粒の涙がためられていた
帝国十二将軍の1人である男のこんな姿はおそらく一生見られない
だろう

「大元帥閣下には言葉で表せないくらいお世話になりました。レイル様、あなただけはなんとしても守りきります」

オルフェンは頭を垂れた

「ありがとう、だけど無理はしないでくれ。オルフェンに何かあったらそれこそ一大事だ、今は息を潜めているときだよ」

レイルはオルフェンに優しく語りかける

「ありがとうございます・・・、本当にあなたは閣下と瓜二つ・・・」

「

その後、オルフェンはレイルと簡単な作戦を話し合い、牢獄を出て行った

「レイル大将、前へ」

レイルは多くの視線を受けながら3歩前へ出た

「レイル大将、判決が出た」

レイルはじつと裁判長の目を見た

「・・・階級の剥奪、そして国外追放を命じる」

その時、観衆の中で数人の男が顔を崩した、が、それは一瞬で誰もそれに気付かなかった

「7日後、6月17日に東のバシク島へ出発するように、これにて裁判を終わる」

レイルは一礼すると帝国兵に連れられ裁判所を後にした

第一部・三 南へ

「バシク島まではあとどれくらいかかるんだ？」

馬車の荷台に両手を縛られた状態でレイルはいた

「このまま行ったら1ヶ月ほどだな」

隣でレイルを監視している中年の帝国兵はそう答えた

帝都を出発してすでに2週間、レイルはこの帝国兵とそれなりに仲が良くなった

「そうか、まだまだ長いな」

レイルはそうつぶやくと目を閉じ、暗闇の世界へ引き込まれた

ふと気付いたとき、日は落ち、あたりは暗くなっていた

次に気付いたのはあたりの騒がしさだ

「戦いの音・・・」

鉄と鉄が当たる音、矢が飛ぶ音、そして人の断末魔

その音も次第に少なくなり、1人の男が馬車へ入ってきた

「久しぶりだな。レイル」

黒髪で、片方の目を眼帯で覆った男だ

「ルトガーか、半年前にあつたきりだったからな」

目の前にいるのはレイルの親友であるルトガー上級大将その人である

「お前な、まかせたってなんだよ、計画性無さすぎだろ」

嫌味を言いながらもその顔には笑みがこぼれている

「来てくれてありがとう」

レイルは率直に礼をのべた

「俺とお前の仲だ、礼はいらねえ」

「きつと、お前の地位も名誉も剥奪されるぞ」

「別に將軍の名もほしくて貰ったわけじゃねーよ」

「そうか、で、この縄ほどいてくれないか？」

「ああ悪い」

そう言つとルトガーは短剣で縄を切つた

「ずいぶん派手にやつたな」

「そう言つなよ、お前の護衛に150もいたんだぞ？手加減する暇無いって」

そう言いながらもルトガーは苦笑いを隠しきれていない

「で、何人連れてきたんだ？」

「こっちに連れてきたのは500だけだ、この先のブリュー平原に俺の直轄軍2500が待機してる」

「おいおい、逃亡するだけなのに3000もいるか？しかも直轄軍だと？クルドア騎士団と言えば帝国でも五指にはいるほどの精鋭じ

やないか」

「まだまだ、その先のアノン城にはシド大元帥を慕う兵が続々と集まっているぜ、当然お前の軍もそこで待機している」

レイルは困惑した

「お前、帝都にでも攻め入る気か？」

「ははは、さすがにそれは俺でもしねえよ、・・・この帝国のどこで国を立ち上げる」

「!!!!!!」

「オルフェンにも承諾済みだ」

レイルは啞然とした

「そんなことできると思っているのか？帝国は総兵力1000万を越すんだぞ？」

「じゃあお前はどっかで父親を殺した帝国をうらみながら隠れて暮らすだけか？そんなんちげえだろ、この帝国は腐ってる、お前がそれを新しくすんだろ！！俺はお前の才能を信じている。だから絶対に出来る！！」

数十秒の沈黙の後、レイルは答えた

「わかった、やろう、だが軍資金が無いぞ？」

「安心しろ、ベガル王国のヴォア公爵に援助を頼んでいる」

ヴォア公爵とはこの世界で一番の大富豪と言われるほどの大富豪だ

「そうか、あの人なら大丈夫だろう」

これで資金面は解決した

「じゃあとりあえずアノン城へ向かおうぜ？」

「ああ、そうだな」

500の兵たちは南へ進撃を開始した

第一部：四 親子

「で、ルトガー上級大將は反旗を翻したのか？」

帝都にて、新たに帝国軍最高司令官に就任したガウス大元帥は苛立ちを隠しきれなかった

「はっ、現在はブリュー平原に待機していたクルドア騎士団本隊と合流してアノン城に向かっています」

「ルトガーめ、謀反者め！！」

ガウスは顔を赤らめ、手に持っていたグラスを床に叩き付けた

「兵を集めろ」

「????？」

「兵を集めろと言ったんだ！！ムクハド大將！！お前は制圧軍を編成しろ！！ダグラス元帥はどこだ！？」

「少しは静かにしたらどうだガウス？私はここにいるぞ」

落ち着いた口調で彼は返答した

まさに武人と言った体格を持ち、炎のように赤々しい赤髪だ

「ダグラス！！お前に先発軍10万の指揮を任せる！！レイル、ルトガー両名の首を取って来い！！いいな！！」

拒否権は無いに等しい

「・・・わかった」

「ダグラス元帥」

部屋をあとにしたダグラスに、1人の男が近づいていった

「少将か、私に何かようか？」

引き締まった細身の体に、赤き髪をたらしたゲイルはダグラスを引き止めた

「あつ、その、元帥はそれでいいのですか？」

「いいとは、どう言う事だ？」

ゲイルは若干迷うそぶりを見せたが、決意したようだ

「元帥と、今は亡きシド大元帥、好敵手であり親友だったはずですよ。その息子を殺すなど、元帥はいいのですか？」

ダグラスは大きくため息をついてから返答した

「私は帝国の人間だ、帝国に反旗を翻した者を許すわけにはいかない。・・・それが、親友の息子であつてもだ」

「自分の息子であつてもですか？父上」

ダグラスはゲイルをカッと睨んだ

「そうだ、たとえ我が息子であつてもだ、それとここでは元帥と呼ばへと言つたはずだ」

そう言うときゲイルに背をむけ、去つた

「一応言っておきます、私も先発隊と行動を共にします」

ゲイルはダグラスの背中に向けて言った

「勝手にしろ」

第一部：四 親子（後書き）

更新が遅いくて申し訳ございません（汗）

それでいて短い・・・

申し訳ございません（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9010d/>

アクイエム戦記

2010年11月20日02時33分発行